

令和6年度 学校評価書 （年度最終）

スローガン 「ホンモノの学びの実現」～誰かの喜ぶ顔が見たくて～（自律力 協働力 実践力）

評価基準 A 目標を上回った B ほぼ目標通り C 目標を下回った

岡山県立津山商業高等学校

学校経営目標等	現状分析	今年度の達成基準	具体的計画	自己評価（中間）	評価	自己評価（最終）	評価	次年度に向けて	関係分掌
重点目標									
1 どのように学ぶか									
○安全・安心な学校環境 ・誰一人取り残すことのない居場所がある学校の実現	他人とリアルで対話する機会が少なく、友人や教師に対して思いやりや思慮に欠ける言動をすることがある。	学校自己評価アンケートで「学校は、社会のルールやマナーが身につくように教育活動を行っている。」と肯定回答する生徒が80%以上。	新入生研修等を通して高校生の生活やネットモラルに関して生徒自らが考えられるような取り組みを行う。	新入生研修の内容は充実したものになったが、時間が経つと高校での生活になじめなかったり、友人関係がうまくいかない生徒が出てきた。校内での携帯電話等の規則が守れない生徒も出てきた。	B	学校自己評価アンケートで「学校は、社会のルールやマナーが身につくように教育活動を行っている。」に、肯定的な回答した生徒が96%であった。他者の存在を意識している生徒は多いと思われる。学年団でも、学校行事や学年集会の中で、他者との協働を促してきた。	A	他者とのコミュニケーションや人間関係がうまくいかない生徒もあり、ソーシャルスキルトレーニング等を積極的に活用する必要がある。	1 年団
	コロナ禍の影響もあり、集団の中で学ぶことに対する価値観の変容が見られる中、登校や対人コミュニケーションに課題のある生徒が散見される。	1年生で2度実施するアセスの学級内分布表および友人サポート、教師サポートの項目がプラスに変容した傾向が読み取れる。	1学期と2学期に担任や委員会の生徒主導で構成的エンカウンターやグループワークのLHRを行う。また、SCやSSWなどの外部支援を有効に活用する。	1学期当初には人間関係づくりとして構成的エンカウンターやGWトレーニングのエクササイズを中心にしたLHRを、2学期当初にはアサーショントレーニングの一環として自己主張のパターンについて理解を深めるLHRを実施した。2学期中間検査中にはアセス2回目の実施を計画している。	B	アセスを利用し生徒支援カードを作成することで、生徒支援体制は整ってきた。利用についての教員研修を行うことで、教員間の連携もおこないやすくなっている。	B	生徒支援シートの完成年度になる。全学年にアセスを使った支援が可能になるので、有効活用に努めたい。また、学校になじめない生徒も散見できるので、対応する教員のサポートを充実したい。	保健厚生課
○安全・安心な学校環境 ・地域と連携する防災訓練等	防災教室で防災意識は高まりつつあると思われる。しかし、緊張感にける生徒も垣間見られる。	校内アンケートを用いて、防災意識が高まった割合が90%以上。	昨年度まで自助を中心として取り組んできた。今年度は、災害発生後の対応を中心に取り組む。	10/23実施予定 NHK岡山のアナウンサーを講師に迎え、報道からみた防災について考えます。	B	声掛けが避難時だけでなく、避難所の生活でも有効であることが理解できたようである。学校では、非常変災時に向けて、防災訓練や避難訓練が積極的に行われていると、肯定的な評価が90%ある。	B	自助・共助と取り組んできた。次の段階として身近な地域に自分たちで何ができるのか考え、行動できるようにしたい。	保健厚生課
○学び続ける力（学びの充実） ・「津商の授業3（スリー）(学習の3ターゲット)」の実行とスタディサプリを活用した基礎学力の向上と家庭学習の習慣化	昨年の学習実態調査の結果、1日あたりの家庭学習時間の平均が1時間未満である。	家庭学習時間調査における1日の平均家庭学習時間が90分以上。	スタディサプリに組織的・計画的に取り組ませ、家庭学習時間の増加と基礎学力の伸長を図る。	夏休みの影響もあってか、2学期始めの基礎力診断テストに付随した調査では、学習時間はあまり伸びていない。スタディサプリへの計画的な取り組みをさらに促していきたい。	B	2025年1月の調査で「1日あたりの学習時間」は平均41分であった。昨年度は30分、2024年9月は45分であった。昨年度よりは増えているが、来年度に受験を控えている2年生としては不十分である。	B	スタディサプリを含む基礎学力を向上させる取組について、45%の生徒は1日に1時間以上学習しているが、28%の生徒は全く学習していない状況を改善したい。	2 年団
	「津商授業3（目標明示・主体的学習活動・振り返り）」の取組を活かし、授業の工夫改善に取り組んでいる。（教員：肯定的93%－95%） 「学びの基礎診断」認定ツールやスタサプを活用し、基礎学力の定着や学習意欲の喚起を促している。（教員 肯定的90%－72%）	学力向上委員会主催の研修会を実施する。 「津商授業3（目標明示・主体的学習活動・振り返り）」の取組を活かし、授業の工夫改善に取り組んでいる。（教員：肯定的95%） 「学びの基礎診断」認定ツールやスタサプを活用し、基礎学力の定着や学習意欲の喚起を促している。（教員 肯定的95%）	実践事例の共有、効果的な指導方法・評価について研修の機会を設ける。 スタサプの課題配信以外の活用（授業・進路や学習到達度に応じた学習）方法を研究し、成果を報告する。	アンケートの結果は、「津商授業3（目標明示・主体的学習活動・振り返り）」の取組を活かし、授業の工夫改善に取り組んでいる。（教員：肯定的90%） 「学びの基礎診断」認定ツールやスタサプを活用し、基礎学力の定着や学習意欲の喚起を促している。（教員 肯定的82%）となった。個別最適な学びについて理解を深め、授業力の向上を図るため、学力向上委員会主催の研修会を10月8日、11月12日に予定している。	B	アンケートの結果は、「津商授業3（目標明示・主体的学習活動・振り返り）」の取組を活かし、授業の工夫改善に取り組んでいる。（教員：肯定的92%） 「学びの基礎診断」認定ツールやスタサプを活用し、基礎学力の定着や学習意欲の喚起を促している。（教員 肯定的92%）となった。研修会を実施し、個別最適な学びについて理解を深め、授業改善に向けた意識を高めるとともに、本校の取り組みの成果を報告することができた。	B	スタディサプリの各教科での活用、授業改善に引き続き取り組み、生徒の学力向上につなげる。	学力向上
	スタディサプリの内容と授業、教科で課している課題のリンクが十分とは言えない。	学習到達ゾーンDゾーンの人数が年度当初より減少。	授業や様々なテストなどにスタディサプリの内容を取り入れて、更なる基礎学力向上を図る。	課題にスタディサプリを活用しており、生徒の取り組みの状況は良い。実用英検受験者に対策をスタディサプリで配信したりといった、個のニーズに応じた活用もできている。	B	スタディサプリを課題に取り入れたりして基礎学力の向上を目指した取り組みを行うことができた。 GTZのDゾーン 1年：54人（第1回）→37人（第3回）、2年：46人（第1回）→35人（第3回）と減少した。	A	スタディサプリの効果的活用法をさらに研究し、生徒の自立的学習習慣、学力向上につなげていきたい。	英語科
	定期検査では得点できていた基礎的な問題においても、課題検査や基礎力診断テスト等、学習から時間が経過すると極端に定着率が低下する。課題検査の得点状況からみて、課題への取り組み方に問題があるように思われる。	GTZ＝Dゾーンの人数が年度当初より減少する。	スタディサプリを日々の学習や長期休業中の課題に有効に取り込み、小中学校等での既習事項も含めて、常に学び直しをさせ、基礎学力の維持・向上を図る。	日々の授業において、小中学校での既習事項を丁寧に復習しながら授業を行っている。また特に1年生においては、高校数学へスムーズに接続できるように個別指導を入れながら丁寧にいった。 また、授業では補いきれない内容については、スタディサプリや長期休業中の課題に工夫を加え、基礎学力の充実を図った。授業での取り組みは継続して行い、効果的な課題の与え方を研究していきたい。	B	スタディサプリを授業や長期休業中の課題、基礎学力の維持に活用することができた。 GTZ＝Dゾーン 1年：（4月）24人→（1月）36人 2年：（4月）53人→（1月）63人 GTZ＝Dゾーンの減少には貢献していないようである。これは、基礎力診断テストの出題範囲に高校の内容が増えてくることが原因であると考えられる。授業内容との連動を図りながらスタサプを活用していきたい。	B	スタディサプリを授業の教材として取り込めるよう活用の仕方を考え、生徒が自立して学習活動に取り組めるようにしていきたい。	数学科

学校経営目標等	現状分析	今年度の達成基準	具体的計画	自己評価（中間）	評 価	自己評価（最終）	評 価	次年度に向けて	関係分掌
重点目標									
○学び続ける力（学びの充実） ・各種ビジネスコンテスト、ビジネスプラン、コンベンションへの商業主催の事業を軸に主体的な挑戦	R5年度は課題研究「地域研究」、商品開発、プログラミング、ビジネス経済応用の科目でコンテストに参加津山城もみじまつりのイベントの一つを企画し、実施した。	各種ビジネスコンテスト、ビジネスプランコンテストへの参加が増える。	商業の学びを実践するために、各種ビジネスコンテスト、ビジネスプラン、コンベンションへの参加を増やし生徒の主体的に取り組める機会を設ける。 美作県民局主催の森の芸術祭やまちじゅう博物館に企画を提案し、実践する。	さんフェアとちぎをはじめ、各種ビジネスプランコンテストに参加している。秋から始まる森の芸術祭に関連したイベントにも参加を予定している。	B	課題研究の各講座を中心に、コンテストに積極的に参加し、山陽学園が主催する「地域マネジメントコンテスト」で最優秀賞、「全国高校生ビジネスアイデアコンテスト」では優秀賞を受賞するなど、良い成績を収めることができた。森の芸術祭に関連したイベントにも参加し、教育旅行プロジェクトでは高校生向けの体験型教育旅行プランを立案し、実際に案内するなどした。	B	課題研究に限らず、各科目でも各種ビジネスコンテスト、ビジネスプラン、コンベンションに参加することで課題解決型の授業に取り組んでいく。	商業科
○学び続ける力（学びの充実） ・「マアップ 津商 目指そう日本一のビジネススクール」を知-ガ-ルに自律的行動	生徒対象の学校自己評価アンケート「自分はあいさつを積極的にしている」の質問項目においては肯定的な回答が85%ではあるが、挨拶をしても声を発さず会釈もしない生徒がいるのが現状。「社会のルールやマナーを守っている」の質問項目においては肯定的な回答が96.6%であるが、指導件数は増えている。安易な考えや不注意による指導が多く、規範意識の低下も危惧される。	生徒対象の学校自己評価アンケートにおいて、現状分析に示している質問項目がどちらも90%以上となり、指導件数が昨年度を下回っている。	・生徒会、各種委員会、教員、学校生活を考える会と連携し、校門でのあいさつ運動や交通指導に取り組む。 ・生徒総会での要望だけでなく、規範意識やマナーアップに対する内容も学校生活を考える会で取り上げていく。 ・マナー向上について、様々な角度から生徒自身が考える機会を生徒会、各種委員会、学校生活を考える会と連携して複数回設定する。	・学校自己評価アンケート（中間）における肯定的な回答が、「自分はあいさつを積極的にしている」で87%、「社会のルールやマナーを守っている」で97%と昨年を上回っている。 ・校門でのあいさつ運動は生徒会や交通委員会、風紀委員会と教員とで協力して、毎朝実施できている。その効果もあってか、昨年よりもあいさつをする生徒が増えたように感じる。 ・学校生活を考える会は9月13日現在未開催である。今後は開催し、規範意識やマナーアップに対する内容について話し合っていきたい。	B	・生徒対象の学校自己評価アンケート「自分はあいさつを積極的にしている」の質問項目において肯定的な回答が88%と昨年よりも増加しているが、目標の90%以上には届かなかった。「社会のルールやマナーを守っている」の質問項目において肯定的な回答が96%と昨年とほぼ同等の結果となった。 ・指導件数については、昨年の同時期と比べて減少はしている。 ・学校生活を考える会と連携してではないが、交通委員がスマホなどのながら運転に対する注意喚起や道路交通法の改定内容について、風紀委員がスマホでの写真撮影、SNSに関する内容について、啓発を行った。	B	今年度はあいさつがかえってくるが多くなったように感じている。今後も教員が積極的にあいさつし、声を掛け続けていく。しかしながら、周りの人がやっているからや安易な考えによる行動、津商モールの際や交通ルールなどで外部の方からご指摘をいただくことがあった。日頃の学校生活から、あいさつだけでなく規範意識やマナーアップに対して取り組んでいきたい。	生徒指導課
○地域との連携（連携強化） ・美作地域産業、PTAや同窓会等と協働する津商モール	孫心弁当宅配ボランティア活動を教員が先導で企画を検討するのではなく、家庭クラブ会長（3年生）と共に社会福祉協議会に訪問したり、企画内容を生徒が主体的に決めていくような授業を行う必要がある。	実施後の振り返りで、肯定的回答が95%以上。	孫心弁当宅配ボランティア活動を通して、地元の社会福祉協議会、民生委員の方や城西地区に住む高齢者の方々と積極的にコミュニケーションを図り、触れ合うことで、高齢者福祉に関心を持ち、思いやりの心を育み、豊かな完成を育成する。	1学期当初に、孫心弁当宅配ボランティア活動の企画説明や過去の資料を紹介した。企画の検討については、まだできていないので、2学期を中心に進めていく。高齢者福祉分野も2学期に指導予定である。	C	2学期12月の実施に向けて、計画通り進めることができた。試作・準備などに費やす授業時数も十分確保できたので、効率よく作業を進めることができた。生徒の事後アンケートから、活動を通して、高齢者に対する思いやりの心を育成することができた。課題としては、1学期は活動に関連した授業を行うことができなかったため、高齢者福祉の授業をさらに発展させた授業を実施し、孫心弁当宅配ボランティア活動に貢献できるようにしたい。	B	来年度への引継ぎ資料をきちんと残し、社会福祉協議会と連携を取りながら計画を立てていく。今年度は、昨年度とほぼ同じ献立だったので、来年度は変更も検討したい。	家庭科
	課題研究・津商モールなどをはじめとする商業科目においては地域との連携を図った取り組みがみられるが、普通教科では地域連携が図りにくい状況である。	授業アンケートを実施しよく理解できた・学んでよかったなどの評価が70%以上とする。	地域の観光ボランティアなどと連携し津山の地理散歩・歴史散歩などのフィールドワークを実施し郷土に対する興味・関心を高める。	1学期は暑い日が続き地理総合・歴史総合におけるフィールドワークである歴史散歩・地理散歩がまだ実施できていない。暑さが和らいだ10月下旬ごろ実施したい。	C	「地理総合」の時間に1年生は衆楽園を中心とした地理散歩を実施し地域連携の実践の端緒とできたが、3年生の「歴史総合」ではフィールドワークを実施する余裕はなかった。	B	地歴・公民科としては比較的余裕がある1年時において「地理総合」の時間を利用して地域連携を図っていきたい。3年次は進路決定に迫られフィールドワークが難しい。	地歴・公民科
○地域との連携（連携強化） ・人財バンク等を活用した進路ガイダンスや地域の教材化	1・2年生の段階から企業ガイダンスを実施することができ、生徒の地元企業の理解につながっている。よりよい進路指導を実現する観点から生徒だけでなく教員も地元企業について深く理解する必要がある。	「進路のてびき」にある目標や計画を意識しながら、3年間を見通して進路意識を高めている。の問いに対する肯定的回答が80%以上。	企業ガイダンス・インターンシップを通して、地元企業とのつながりをより強固なものにする。また、直近の卒業生との交流を設け、キャリア意識の高揚を図り、3年間を見通したキャリア教育につなげる。。	中間評価において、「進路のてびき」にある目標や計画を意識しながら、3年間を見通して進路意識を高めている。の問いに対する肯定的回答が94%となっている。学期末の段階で、進路ガイダンスや大学訪問など、進路意識を高める行事を組み込んでおり、それが結果として表れている。進路に関する目標を設定するとともに、その目標に向けた主体的な取り組みを促すことでさらなるキャリア教育の充実にも努める。	A	年度末評価において、「進路のてびき」にある目標や計画を意識しながら、3年間を見通して進路意識を高めている。の問いに対する肯定的回答が92%となっている。学期末の段階を中心として必然性があるタイミングで進路行事を組み込むことにより進路意識を高める状況を作るよう努めてきた。進路実現に活用するツールについても利便性を高め、生徒の主体的な進路選択につながる体制を強化していきたい。	A	「進路のてびき」の活用場面を増やすため、掲載することが適当な情報については、新たに盛り込む予定にしている。生徒がそれを見て、必要な時に必要な取り組みができるような体制づくりに努める。	進路指導課
	昨年度の学校自己評価アンケート「学校は、地域の組織・人々と連携する教育活動を行っている」項目で「そう思う」が88%。	同アンケート同項目で、「そう思う」が95%以上。	総合的な探究の時間において、地域の組織と交流したり、地域の人財から講話を聴いたりすることによって、現在の課題を将来の自分事として捉えるようにする。	学校自己評価アンケート（S20）で肯定的な評価は93%（全体93%）となっている。1学期は真庭市・津山市阿波、夏休みは地域各所へ出向いて話を聴いている。今後はこれらを基に地域の課題や将来の自分について深く考えさせていきたい。	B	学校自己評価アンケートS20「学校は、地域の組織・人々と連携したり、他校と関わる教育活動を行っている」で「そう思う」が94%。S29「自分は、特別活動・総合的な探究の時間・社会貢献活動が人間力の向上につながっている」で「そう思う」が92%。	A	総合的な探究の時間や津商モール、進路ガイダンス等の取組が生徒と地域をつなぐ良い機会になっている。来年度の課題研究につながるようにしたい。	2年団
2 生徒をどのように支援するか（どのような配慮が必要か）									
・わかる授業の実践 (ICT活用・ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ教育・個別最適な学び・協働的な学びの取り入れ)	自分の考えを他人に話したり、文章にまとめて表現したりすることが苦手である。小論文模試の得点も平均的（60～70点）である。	最終的に実施される小論文模試において80点以上をとる生徒が1年生5名以上、2年生が10名以上、3年生が20名以上。	表現力・思考力を涵養する基礎的な技術指導を反復して行い、論理的に文章表現する力を養う。	「現代の国語」（1年）、「論理国語」（2・3年）を中心に論理的な文章表現を高めるための学習活動をシラバスの計画に沿って実施している。また、「言語文化」（1年）、「文学国語」（2・3年）においても前述の教科に連動させた授業展開や共通のワークブックを用いて表現力の定着・向上を図っている。	B	小論文模試（第一学習社）において、80点以上を得点した生徒は少なく、目標は達成できなかった。今年度、国語科として、1年生～3年生まで、表現（書く）活動や小論文対策に重点を置き授業を進めてきた。	B	今年度の取組を今後も継続し、自分の意見を、現代社会の課題を踏まえて論理的に述べられる力を育成していきたい。	国語科
	個別最適な学習支援が行えるように組織的な対応に努めている。（教員：肯定的86%←89%）	11月の公開授業週間に公開授業（研究授業）を行い、個別最適な学習支援が行えるように組織的な対応ができている。（教員：肯定的90%）	学力向上委員会内で小委員会を組織し、研修会等を企画運営することで授業改善に組織的に取り組む。	アンケートの結果は、個別最適な学習支援が行えるように組織的な対応に努めている。（教員：肯定的90%）肯定的な意見が増えた。2学期は研修会や公開授業を実施し、継続して授業改善に組織的に取り組む。	B	アンケートの結果は、個別最適な学習支援が行えるように組織的な対応に努めている。（教員：肯定的90%）研修会を実施し、個別最適な学びについて理解を深め、研修会で学んだ「他者参照」を授業で取り入れるなど、授業改善に向けた意識を高めるとともに、本校の取り組みの成果を報告することができた。	B	実践につながるようにな研修会等を計画的に企画運営し、授業改善に組織的に取り組み、生徒の学力向上につなげる。	学力向上

学校経営目標等	現状分析	今年度の達成基準	具体的計画	自己評価（中間）	評価	自己評価（最終）	評価	次年度に向けて	関係分掌
重点目標									
・自己管理能力の向上(キャリア・パスポートやアプリ型スケジュール手帳等の活用)	昨年度「手帳を積極的に活用した」という問いに対して「はいそう思う」「だいたいそう思う」と答えた割合が48.7%。	60%以上に引き上げること	進路選択・進路決定に関わる行事や就職試験・入学試験に向けての日程・提出物などを手帳を使用してスケジュール管理を徹底させ自己管理能力の向上を図る。	1学期振り返りアンケートの「毎日手帳に予定や課題などを記入している」という項目の自己評価の平均は5点満点で2.78、「手帳を使って予定や課題などの自己管理ができています」という項目の自己評価平均は2.87であった。昨年度よりは自己評価は高くなっているため目標値を達成できるように指導していきたい。	B	「2学期を振り返ってみよう」というアンケートの結果によると、毎日手帳に予定・課題を書き込んでいるという項目で肯定的な回答をしたのは154人中57人、手帳を使ってスケジュール管理ができていますという項目で肯定的な回答をしたのは154人中60人であった。割合では37.0%、38.7%である。しかし、Chromebookによって予定や連絡事項をチェックしていると回答した生徒は154人中140人。割合は90.9%で、手帳以外で予定など管理しているようである。学校自己評価アンケートの項目9「自分は、手帳を活用し自己管理能力の向上に努めている」において肯定的な回答をした生徒の割合は55%であり、全校生徒の中においても3年生の肯定的な回答をした生徒の割合が低いことがわかる。	C	手帳を使っでの自己管理能力向上にこだわらず、スマホアプリやクロームブックでのスケジュール管理なども含めて自己管理を行う必要性を教えたい。	3年団
・自己管理能力の向上(キャリア・パスポートやアプリ型スケジュール手帳等の活用)	昨年度の学校自己評価アンケート「自分は、手帳を活用し、自己管理能力の向上に努めている」項目で、「そう思う」が38%。	同アンケート同項目で、「そう思う」が70%以上。	手帳に、目標や学校行事、提出物の期限、週の振り返り等を記入する場面をつくる。	学校自己評価アンケート（S9）で肯定的な評価は43%（全体49%）となっている。昨年度より効果は出ているが、目標には約27%届いていない。学校行事や提出物の自己管理など、来年度の進路実現に向けて手帳の有効活用を促したい。	B	学校自己評価アンケートS9「自分は、手帳を活用し、自己管理能力の向上に努めている」項目で、「そう思う」が41%。昨年度は38%。年度当初と2学期初めに、スケジュール手帳を使うことの意義と具体的な使用方法を説明したが、十分な効果は得られなかった。	C	来年度は受験の年になるので、進路のゴール（目標達成）から逆算して、自分のやるべきことの計画が立てられるよう、粘り強く指導していきたい。	2年団
	自らの時間に余裕を持って行動し、目標達成のために努力することが苦手である。	学校自己評価アンケートで「自分は、手帳を活用し、自己管理能力の向上に努めている」と肯定解答する生徒が60%。	年度当初にスケジュール手帳の活用法を講義し、目標や振り返りを記入させる。	年度当初に手帳の使い方について講義し、機会をみては利用するよう促しているが、目標ややることリストを記入している生徒は少ない。	C	学校自己評価アンケート「自分は手帳を活用し自己管理能力の向上に努めている」に肯定的な回答した生徒が45%であった。	C	手帳に記入する機会を意図的につくり、スケジュールが記入出来るよう使い方等を指導していく必要がある。	1年団
・主体性の伸長(生徒の企画・運営による安全・安心な学校行事や委員会活動)	自身の健康に対して、対応がその場しのぎになっている生徒が見られる。主体的に自身の健康について考え行動できる力を育てる必要がある。	文化祭の展示を保健委員会として行い、啓発活動を行うことができる。興味を感じて展示会場への入場する生徒が50人以上。	保健委員会として、自分たちで展示内容を検討し、文化祭で調査・企画・実施・検証する。	「癒し」をテーマに入浴剤づくりに取り組みます。ストレスがある中で、冷静に自分を見つめられる時間になって欲しいです。	B	保健委員会として、文化祭の展示や、毎月の健康だより、健康に関するポスターの掲示などの取り組みができた。ストレス社会の中でどのように向き合ったらよいのか考え、行動することができるようになりつつある。	B	自身の健康に対して、対応がその場しのぎになっている生徒は少なからず見られる。他者の健康に配慮しながら、行動できる力を育てる必要がある。	保健厚生課
	自彊祭後の生徒アンケートで「自彊祭全体を通しての満足度」という質問項目において、肯定的意見が96%であった。昨年は数年ぶりに制限なしの開催となった。	生徒対象の事後アンケートにおいて、現状分析に示している質問項目が90%以上となり、前年の自彊祭にはない取り組みを実施した。	・自彊祭を中心とした生徒会行事の計画、立案、実施のバックアップをする。 ・2学期始業式の日程変更にとまない、開催日が変更となったが、今年度の準備日程等については昨年度と同様に行う。今年度の実施の様子を受けて、次年度以降、よりよい形となるよう早めに検討する。	・自彊祭後の生徒アンケートで「自彊祭全体を通しての満足度」という質問項目において、肯定的意見が93.7%であった。文化の部では、例年になく有志によるステージ発表も多く、体育の部については昨年にはない新しい競技を実施した。	B	・自彊祭後の生徒アンケートで「自彊祭全体を通しての満足度」という質問項目において、肯定的意見が93.7%であった。文化の部では、例年になく有志によるステージ発表も多く、体育の部については昨年にはない新しい競技を実施した。	B	・音楽祭が今年度は未実施となったが、様々なご意見をいただいた。生徒の意見も聞きながら、来年度以降の開催可否を決定していく。 ・自彊祭については、今年度から9月下旬での実施となり、昨年度と比べて気候の心配は減ったが、金曜開催や10月実施のほうがよいというご意見もある。祝日等の影響も含めて再検討する必要がある。競技内容についても、生徒と話をし、種目数を増やした。それが影響しているかはわからないが、今年度はけがをする生徒が少し多くなり、下校時刻が遅くなった現状もある。これについても検討していく。	生徒指導課
・特別支援教育やいじめ防止推進に関わる取組	比較的に幼少期に診断を受けてきた生徒の入学が漸増し、合理的配慮を求めるケースが年々増加しているが、特性理解や具体的な支援方法について教師が学ぶ機会がまだまだ少ない。	生徒の抱える問題や具体的な支援情報が教員間で共有される。学年団会議での「気になる生徒」の情報が教育相談係にも円滑に伝わり、早急な支援につながるようになる。	令和5年度入学生から開始した配慮事項や生徒情報データの継続的な更新・活用を促す。個別対応が必要な場合はニーズに対応した支援につなげる。	年度当初に、更新データをもとに1、2年生については必要な配慮事項や本人特性などの情報を全教員で共有している。また、情報データの更新についても1学期末に担任へ更新の依頼をし、全クラスで情報入力完了している。3年生も含め、個別対応が必要なケースについてはSC、SSWへも状況を伝え、要望があれば対応してもらえるように準備をしている。	B	データが更新・蓄積されることで活用されやすくなった。生徒支援カードにより生徒の状況を共有することができ、迅速な生徒対応につながっている。個別対応が必要な生徒が増加していることから、担任へのサポートも適宜行えるようになった。	B	個別対応が必要な生徒の増加傾向が続いているので、特性理解や具体的な支援について教員の理解を深めたい。	保健厚生課
	生徒対象の学校自己評価アンケート「人権及び命の大切さを考える機会がある」という質問項目において、肯定的回答が93.7%であった。昨年、性の多様性に関する教員研修を実施した。	学校自己評価アンケートにおいて、現状分析に示している質問項目が生徒・保護者ともに90%以上となる。	・人権（いじめ）調査アンケートを各学期に1回実施。 ・教員のみにとどまった性の多様性について考える機会を生徒、保護者にも設ける。 ・教育相談係と連携し、早急に情報共有できるようにし、いじめの早期発見に努める。 ・インターネットモラルに関する啓発活動を各学期に1回実施。そのうち1回は、委員会や学校生活を考える会主導で実施する。	・学校自己評価アンケート（中間）における、「人権及び命の大切さを考える機会がある」の肯定的な回答が89%と昨年よりも低くはなっているが、10月に性の多様性についてのLHR、11月に命を考えるLHR、12月にはヤングケアラーについての講演会を実施する予定である。 ・人権（いじめ）調査アンケートを1学期に1回実施している。 ・インターネットモラル教室を講師を招いて5月に実施している。2学期以降も実施していく	B	・生徒対象の学校自己評価アンケート「人権及び命の大切さを考える機会がある」という質問項目において、肯定的回答が96%と、昨年を上回る結果となった。今年度、新たに性の多様性についての講演会を行ったことが大きな要因と考えている。 ・インターネットモラルに関する啓発については、1学期に外部講師による講演、2学期に警察による注意喚起、3学期に風紀委員会による啓発活動を実施することができた。	B	・インターネットモラル教室は来年度も実施する予定。現2年生については2度受講しているが、内容については毎回新しい話題を取り入れて話をしてくださるため、問題ないと思える。 ・今年度、人権LHRとして性の多様性についての講演会を生徒、教職員を対象に行ったが来年度以降も実施する方向で内容も含めて検討していく。また、可能であれば対象を保護者含めていきたい。	生徒指導課
・学年主任会や職員会議等での全職員の協働体制と情報共有	教員対象の学校自己評価アンケート「報告・連絡・相談等が行われ、情報が共有化されている」という質問項目において、肯定的回答が、64%であった。	教員対象の学校自己評価アンケート「報告・連絡・相談等が行われ、情報が共有化されている」という質問項目において、肯定的回答が、80%となる。	・会議を増やすのではなく、学年間や分掌間を調整して協働体制を構築する。	教員対象の学校自己評価アンケート「報告・連絡・相談等が行われ、情報が共有化されている」という質問項目において、肯定的回答は若干多いものの、昨年度末より大幅に改善しており、一定の成果が見える。学校運営側から早めの情報提供等の効果が表れている。しかし、学校行事や補習の日程についての周知がないとの指摘があるため横との繋がりについての情報共有について改善策を考える必要がある。	B	教員対象の学校自己評価アンケート「報告・連絡・相談等が行われ、情報が共有化されている」という質問項目において肯定的回答が76%、学校運営側から早めの情報提供等の効果が表れている。しかし、学校行事や補習の日程についての周知がないとの指摘があるため横との繋がりについての情報共有について改善策を考える必要がある。	B	「報告・連絡・相談等が行われ、情報が共有化されている」の回答率が上がるように今一度、未来会議や学年主任の会などで職員間での情報共有を密にしていこうにしたい。	全職員

学校経営目標等	現状分析	今年度の達成基準	具体的計画	自己評価（中間）	評 価	自己評価（最終）	評 価	次年度に向けて	関係分掌
重点目標									
3 実施するために何が必要か（指導体制の充実、必要な支援、家庭・地域との連携・協力）									
・全職員による学校運営協議会への参加（チーム津商・伴走者の拡大）	職員側での学校運営協議会の報告が不十分なため、学校全体での協議という形にはなっていない。	全職員が学校運営協議会の活動内容を把握して、それぞれの部署で実現可能な地域連携や地域とともに歩む学校になるよう検討、実現していく。	・事前に学校運営協議会で取り上げる議題の内容を教職員に周知し、生徒の実態や学校側の思いを吸い上げ、円滑に協議が行われるようにする。 ・学校運営協議会実施後に、職員会議等を利用し教職員に会議の内容を伝え、協議内容を共有し、地域の声を教職員に届ける。また、地域からいただける支援の有効活用を図る。	情報共有の面では、教職員へは「地域が本校に求めていること」や「地域として学校に協力できること」をまとめ、職員会議において時間を取って説明を行った。また、生徒に対しては集会の場面で協議内容を伝えることができた。 各課科長・学年主任に、学校自己評価（中間期）を受けての振り返りと年度後半に向けての取り組み改善、また、スクールポリシーやランドデザインの見直しを含めて一体的に行うようお願いをしているところである。	B	学校自己評価「本校は学校運営協議会の協議内容が職員間で共有されており、地域の声が反映され、また、地域の支援や協力が促進される教育活動が行われている。」（教職員対象）の項目において、肯定的意見が89%(R5)→95%(R6)と6ptアップしている。また、学校運営協議会の内容を踏まえたスクールポリシーやランドデザインの見直しを図ることができた。	A	引き続き、事務局（課科長・学年主任）が学校運営協議会と本校教職員とのパイプ役となり、地域の声を教職員に届けるとともに、委員や地域からいただける支援の有効活用を図りたい。	教務課
・連携・協働を支えるICT環境整備・活用（1人1台端末、Wi-Fi等）	【R5学校自己評価より】 Owi-fiと1人1台端末を積極的に活用した授業を行っている・・・90%（教員） O先生は、ICTを活用したり、グループワークなど、創意工夫した授業を行っている・・・94%（生徒） 生徒は連携や協働を支えるツールとしてICT機器をノートや鉛筆のように当たり前 の文房具として活用している状況になりつつある。家庭に持ち帰らなかったり、充電をして来ない生徒が一定数いる。	学校自己評価の「授業の工夫・改善」に関する項目について、生徒・教職員ともに肯定的意見が昨年度と同等以上である。	学力向上委員会とも連携し、スタディサプリや家庭学習で効果的にChromebookを活用する学習方法の研究を行い、実行していく。	R6学校自己評価（中間期） Owi-fiと1人1台端末を積極的に活用した授業を行っている・・・90%（教員） O先生は、ICTを活用したり、グループワークなど、創意工夫した授業を行っている・・・97%（生徒） 昨年度と同程度以上の結果であり、ICT環境整備の面では良好であると言える。一方で、「個別最適な学習支援が行えるように組織的な対応に努めている」（教員）の回答状況からは、否定的回答が10%あり、個別最適な学習支援に有効なツールである1人1台端末の活用方法やスタディサプリの活用を含めた端末の活用方法について、研修や積極的な情報共有を行う必要性がある。	B	R6学校自己評価（最終） O私はwi-fiと1人1台端末を積極的に活用し、個別最適な学びと協働的な学びを充実させた授業を行っている・・・95%（教員） O先生は、ICTを活用したり、グループワークなど、創意工夫した授業を行っている・・・95%（生徒） 昨年度と同程度以上の結果であった。また、「個別最適な学習支援が行えるように組織的な対応に努めている」（教員）の回答状況も2pt上昇している。教務課としてChromebookを効果的に活用した授業研究はほとんどできていない状況であるため、学力向上委員会とこれまで以上に連携して、協同していく必要がある。	B	・学力向上委員会との連携により、授業改善をしていく。 ・校内のWi-Fi接続環境が不安定になる頻度が上昇しているため、授業に支障が出ている。この改善策を県の教育情報化推進室に力を借りながら改善していきたい。	教務課
・戦略的広報(中学校が求める進路情報を把握、7月配信等)	【R5学校自己評価より】 O津商に進学させてよかった・・・94%（保護者） O学校生活が充実しており満足している・・・91%（生徒） O学校は、オープンスクール・ホームページなどを活用して、積極的に学校PRを行っている・・・96%（生徒）、94%（保護者） ・中学生の進学希望者数は定員160名に対し、208名（1.30倍）であった。（実質倍率1.21倍） 美作地区の中学卒業者数はR5年度よりも100名程度激減し、厳しい状況になる。	本校への入学志願者数が募集定員の1.1倍以上である。	・商業科と連携し、オープンスクールを本校生徒が先生役となって授業をしたり、座談会を設定したりするなどして、中学生が自分の未来を想像できるような形で実施する。 ・学校HPに限らず、SNSを活用した広報活動を研究する。	今年度のオープンスクールについては、商業科の協力があって在校生が主体となって行う形にバージョンアップして行うことができた。アンケート結果からも好評であったことがうかがえた。また、参加者（中学3年）は昨年度より5.7%減（352人→332人）であったが、これは美作地域の中学卒業者の減少率（6.0%減）と同程度であり、昨年度と同様の割合の中学3年生が参加していると言える。10月の学校説明会（中2・3生対象）においても、在校生が主体となって実施する形にしたり、ミニ体験授業を新設したりするなど、本校の教育活動の魅力を十分に発信できる形に充実させる計画である。SNSの活用については、学校公式Instagramを開設し、準備しているところである。	B	R6学校自己評価（最終） O津商に進学させてよかった・・・97%（保護者） O学校生活が充実しており満足している・・・94%（生徒） O学校は、オープンスクール・ホームページなどを活用して、積極的に学校PRを行っている・・・95%（生徒）、99%（保護者） ・中学生の進学希望者数（1月実施）は定員160名に対し、208名（1.30倍）であった。 美作地区の中学卒業者数はR5年度よりも100名程度激減している中で、昨年度と同じ希望倍率があったことについては、取り組みに十分な効果があったと考えている。	A	学校広報やオープンスクールにおける効果のあった取り組みは継続しつつ、地域からお預かりした生徒が充実した学習活動ができるよう、授業改善や生徒を主語にした教育活動の充実を図っていきたい。	教務課
・ホーム活動、特別活動、津商モールへの自彊入バイブル教育(ルブリック評価の確立)	校内の諸活動や地域との連携行事において、受動的・消極的である。	学校自己評価アンケートで「学校は、特別活動等を通して望ましい職業観・勤労観を高める努力をしている」と肯定回答する生徒が80%以上。	日常の学びを実践する場として学校行事や津商モールへ参加させ、その準備過程で一人一役を担わせる。	高等学校での生活には慣れてきた。行事などの集団で活動する場面も増え、積極的に活動する生徒も多くなる。	B	学校自己評価アンケート「学校は、特別活動等を通して望ましい職業観・勤労観を高める努力をしている」に肯定的な回答した生徒が92%。頼まれたことや与えられた役割には応えようとするが、自分から進んで全体のために貢献しようという生徒は少ない。	A	2年次において、地域の担い手としての意識を育むように、今現在、地方が抱えている課題について考えさせる機会を積極的に設ける。	1年団
・ホンモノの学びの実現に向けた学習環境整備（地域・企業との連携）	商業科の各科目において、津商モールを題材とした授業を行った。津商モールに向けた講座、学科講演会等では実際にビジネスに携わる方から学ぶ機会を設けた。保護者や地域と連携した指導に努めている（教員 肯定的90%←97%）	地域・企業との連携した授業を10回以上、保護者や地域と連携した指導に努めている（教員 肯定的95%）	地域・企業との連携した授業を各科目で実施する。津商モールにおいて美作地域産業と連携した店舗経営を行う。	社会人講師の活用や、大学生と協働して商品開発行うなど地域・企業との連携した授業や取り組みを行っている。津商モールについては12月7日の開催に向けて、企業と連携した取り組みを行っている。	B	例年実施している津商モールでのマナー講座、POP講座、写真の撮り方講座に加え、C'snetと連携したCM制作、大学生と協働しての商品開発など、新しい取り組みもできた。アンケート結果は、保護者や地域と連携した指導に努めている（教員 肯定的97%）となった。	B	津商モールや課題研究以外の科目でも地域・企業との連携した授業を各科目で積極的に実施し、ホンモノの学びの実現に向けた学習環境の充実を図る。	商業科